記念館会報　Vol. 24　　2019. 2. 27

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

西尾克己さん、弘江さん追悼の辞

受け継ぐ会・岐阜支部長 今井雅巳
（「記念館」理事）

西尾克己さん 98 歳、最期の言葉。「壁があって良かった」2018 年 11 月 16 日、介護士さんから、「何かおっしゃりたいことは？」との問いかけに、応えられたラスト・ワード。

せせらぎの里に入居するとき、「奥様との隣り合った部屋の壁を抜きましょうか。20 万円いただければ壁を抜いて一部屋にしますが。」との提案があった。しかし、「ドアを利用すればよいから。」と、壁は抜かれなかった。奥様の止まらないおしゃべりに人知れず閉口なさっていた。その思いがラスト・ワードとなった。介護士さんからこの言葉を聞いた時、ご家族はみな大笑いされたとか。

（西尾さんご夫妻）

ご家族で「白寿の会」を催されたとき、「一言ずつ挨拶を」とのお願いに、克己さんも妻の弘江さんも延々と大演説を振るわれたとのお話も伺った。

克己さんより遙かにお元気だった弘江さんは、2018 年 10 月 8 日に 90 歳で急逝されていた。点滴だけで 40 日余りを生きられた西尾克己さんは最愛の伴侶の死を知らぬままに黄泉路へと旅立たれ、彼の地で再会されることとなった。

撫順戦犯管理所から帰国した克己さんに家族は、鶴岡村診療所看護婦、弘江さんとの結婚を奨めた。弘江さんは長野県から開拓団の娘として満州に渡り、看護婦の資格を取り働いていたが日本敗戦の後、苦労して帰国。弘江さんは克己さんの父親：西尾茂重鶴岡村長から招かれ、克己さんの故郷で看護婦をしていた。同じ満州体験を持つ弘江さんは 16 年ぶりに帰国した「浦島太郎」の良き理解者であった。克己さんの中帰連・岐阜支部長としての活動を早くから賛助会員として支えてこられた。

山岡町のご自宅に伺い、克己さんに戦争加害の実相を証言していただいて辞去する時、弘江さんはいつも取れたての野菜や、お手製の美味しい漬け物をお土産にくださった。夫婦二人三

目　　次

・西尾克己さん、弘江さん追悼の辞 ‥‥ 1
・天津外国語大・修剛前学長来館 ‥‥‥ 2
・連載「記念館資料室から」 ‥‥‥‥‥ 2
・『中帰連』63 号発行 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 3
・「供述書を読む会」発足‥‥‥‥‥‥‥ 4
・神奈川県高教組「会報」で紹介 ‥‥‥‥ 4
・真宗大谷派「平和展」ご案内‥‥‥‥‥ 4
・「岡まさはる長崎記平和資料館」‥‥‥ 5
・「御礼と感謝」‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 5
・「蔵書案内」‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 5
・「事務室」から‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 6
・橋本勝さんの「風刺マンガ」 ‥‥‥‥ 6
・「振込用紙」について‥‥‥‥‥‥‥‥ 6

29　岐阜　13版　2018年(平成30年)11月23日(金)　朝日新聞

岐阜

「過ち」と「加害」語り続けた

元日本兵　恵那の西尾克己さん亡くなる

（2018.11.23　付「朝日新新聞・岐阜版」）

脚で、日本の戦争加害を伝え、日中友好に尽力された。

ご自宅の裏山を自ら切り開いて造られた墓地を案内していただいた時、克己さんは家の周り一面に咲く「ミヤコワスレ」（花言葉「しばしの別れ」「惜別」）を指さして、「これこそが撫順の花だよ」と語られた。

「いかにして契りおきけむ白菊を都忘れと名づくるも憂し」佐渡：順徳上皇

「しばしの別れ」であった撫順戦犯管理所の先生方、中国帰還者連絡会の皆様方、そして奥様を交えて彼の地で「再会の喜び」を心ゆくまで語り合ってください。ご冥福をお祈りいたします。　　　　　　　　　　　合掌。

天津外国語大学・修剛前学長来館

横浜の「生涯教育」国際学会に参加されていた天津外国語大学前学長の修剛先生が、日程の都合を付けて下さり、12 月 12 日に来館下さいました。同大学は中国の外国語専門８大学の一つで、昨年まで修先生は同大学の学長を 17 年もされていました。

修先生は「中帰連・記念館」に関心を持って下さり、当日は松村理事長や理事らと面談しました。

（天津外国語大学）

意見交流の中で同大学の日本語学部の学生は 1 学年 220 人、院生が 100 人くらいおり、中国全土では 500 学部 70 万人くらいの学生が日本語を学んでいるとのことでした。

（前列中央・修先生、前列右・松村理事長）

連載　記念館資料室から

第17回　草創期の息吹を伝える内外の出来事

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』第 7 号は、1957 年 10 月上旬の発行です。中帰連の結成大会でもあった第 1 回全国大会が 9 月 22 ～ 23 日に東京の山楽ホテルで開催されました。その直後ですから、大会報告が中心的な内容となっています。前回確認した通り、この全国大会にむけて、本部から新しい活動の方向性が大きく 2 点にわたって打ち出されていました。 1 つは、政府からの補償が困難なことから、会員同士が生活や事業で援助し合う活動を始めること、もう一つは、中帰連の枠にとどまらず日中友好協会などより大きな組織と連携して日中友好活動を推進することでした。

大会には、遠くは鹿児島や山口、北海道や福島からも支部代表が駆け付け、100 名以上が集う盛況でした。帰国後 1 年間の活動を振り返り、その成果と課題を確認した本部報告に続き、各支部からの活動報告は**「深い感動」**を呼んだといいます。**「おれたちは、楽だからやるんじゃない、苦しいからその組織が必**

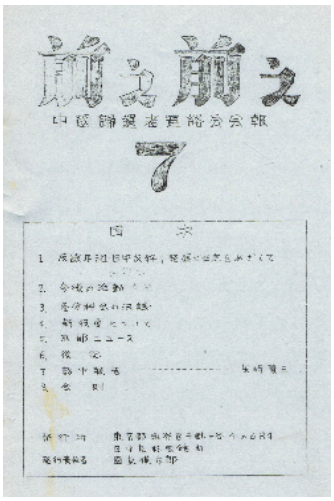
要であり、闘わなくちゃならないんだ」（鹿児島・山崎智良）。**「報告者の熱意とその内容の重要さにひかれて」**時間がオーバーし、質疑応答や分科会での検討は午前1時にまで及びました。

本部から出された上記の２つの「新しい方向性」は、議論の末、全員一致で採択されました。繰り返しを避けるため、ここでは、その他の興味深い論点に触れておきます。

一つは、早くも財政問題が取り沙汰されている点です。**「一緒に帰った人は全部で1024名おりますが、今日では必ずしも全員が結集しているわけではなく、一部の人は個人の事情によって遠ざかりたいと思っているし、また反対の意志を表している人もいる状況であります」**。ただ、単に自由に出入りすればいいという組織ではないという考えから、**「色々な事情によってはっきりしない態度をとっているか、あるいは遠ざかりたいと考えている人に対しても、自分自身の心配事として関心をもち、各種の方法によって援助し、団結を強めていく方向に努力せねばなりません」**と呼びかけます。後に議論される「中帰連の独自性」をめぐって、基本的な発想が既に表れていますが、この点もやがて組織を揺るがせていきます。

次号の第8号では、掲載しきれなかった質疑応答や支部報告などを読むことができますので、引き続き、草創期の息吹に触れていきたいと思います。

今号の内容でもう一つ御紹介しておきたいのは、末尾に掲載されている矢崎賢三（山梨支部）による**「訪中報告」**です（県の中国産業振興視察団の一員として）。遺骨送還運動の一環などで、帰国後に既に訪中を経験した会員が若干いましたが、滞在中に撫順戦犯管理所を訪れて、指導員の方々と直接交流できたというのは、この後も含めて珍しいケースです。孫明齋所長、金源先生、崔仁傑先生、温久達先生らが歓迎されました。先生方は帰国戦犯の**「一人一人の名をあげ、彼はどうしているか、どんな困難にあっているか等聞かれました」**。しかし、準備が足りず十分に答えられなかったことを「自己批判」しなければいけないと感じたと矢崎は記しています。自分たちは**「環境の変化」**などで**「とかく忘れがち」**になるものの、先生方は**「1日として我々のことを忘れたことは」**ないことを知ったからです。そして、帰国戦犯たちが**「時折り家族の写真等を送り手紙をくれることを望んでおられ」**たことを伝えています。


前之前之
中帰連関東甲信越支部会報
7
目次

この後、帰国戦犯たちが長年にわたり何千通もの手紙を管理所に送り続けた事実は、日中双方の激動の 20 年以上を乗り越えた段階で明らかになります。

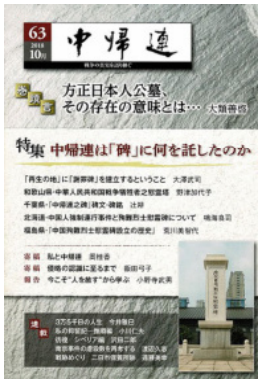
『中帰連』６３号発行

かつて右翼などから中帰連の発言・証言が「嘘だ、洗脳だ」との攻撃や、一部の学者からも「信用できない」との批判が起きました。

中帰連はその反論として 1997 年に季刊『中帰連』（現在「不定期」）を発刊しました。高齢のため 2002 年に中帰連が解散した後も、「中帰連発行所」が編集発行を続けています。

私たちは中帰連の皆さんが如何なる体験をし、帰国後、如何なる生き方をしたかを伝える努力を続けています。

日本軍に多くの市民が虐殺され一番被害の多かった中国が、1956 年の特別軍事法廷で起訴されたのは 1062 人のうちわずか 45 人、死刑も無期もなく他全員は起訴免除が決定し帰国を許されました。その有罪の 45 人にはシベリアの 5 年と管理所の 6 年の計 11 年が刑期に参入されました。そして、帰国に際して「新しい



服に靴、毛布、更に現金 50 元」までもらい、お土産を買い帰国したことをどれだけの日本人が知っていることでしょうか。彼らは周恩来の「復讐や制裁では憎しみの連鎖は切れない」との人道的扱いを受けて目覚め「鬼から人間に戻して貰った」と感謝していました。
【必用な方は記念館まで、本誌 500 円（〒別）振込用紙同封でお送ります】（A5 版 156 頁）

1997年(平成9)8月18日　月曜日　13版　社会　30

中国での日本軍「加害」証言

「疑問視」に反論

「中帰連」が季刊誌創刊

初版売り切れ2千部増刷

（「創刊号」の増刷を報じる『朝日新聞』）

「供述書を読む会」発足

中帰連の皆さんは 6 年間、撫順犯管理所と一部太原戦犯管理所に収容されていました。

彼らは当初「俺たちは戦犯ではない」と反抗していました。しかし、人道的扱いを受けるなかで、彼らは徐々に過去を振り返り反省しました。そして、彼らは罪を認め管理所内で「供述書」書き残しています。

記念館では昨年末にその「供述書を読む会」を発足させました。学者からは笠原十九司さん、荻野富士夫さん、姫田光義さん、伊香俊哉さん、松村高夫理事長や一瀬敬一郎弁護士、市民から理事なども含め 20 名余りが参加し読み進め解読しています。今後も月 1 回程度で作業を進めます。

（供述書を読む会）

神奈川県高教組「会報」で紹介

過日、神奈川県立高校の教師が来館下さり、同高教組の会報『かながわ平和通信』に 5 頁にわたり「中帰連・記念館」の紹介記事を掲載下さいました。

真宗大谷派「平和展」ご案内

真宗大谷派の名古屋教化センターが毎年 3 月に「平和展」を開催しています。

この平和展の特徴は戦時中に真宗大谷派自身が、当時、教義に「一殺多生」の教えを是としたこと、また戦争に如何に協力してきたかの自己批判・反省をメインに展示しています。

戦時中に「戦争は罪悪である」と発言したことを密告された同派の僧侶は陸軍刑法に違反すると逮捕起訴され有罪判決を受けました。それを受けて同派も僧侶の資格を最下位に格下げしました。

その後、2007 年に同派は当時の処分が間違いだったと認め、僧侶のご遺族に謝罪し名誉を回復させています。他にも同様の同様の扱いを受けた僧侶がいます。

当時、中国韓国への布教活動など多くのパネル、写真、地図などで展示しています。

その平和展の立派な「展示資料集」は毎年作成され無料で希望者に配布しており、記念

館にも保存してあります。今年の開催は下記の通りです。

日程：3 月 16 日（土）～ 24 日（日）
時間：10 時～ 18 時　入場無料
場所：「名古屋教務所 1F 議事堂」
（真宗大谷派名古屋別院・東別院）
地下鉄名城線「東別院」駅下車 4 番出口、西に徒歩 5 分
問合せ：TEL：052-323-3686

「岡まさはる記念 長崎平和資料館」

場所：長崎市西坂町 9-4（長崎駅徒歩 5 分）
休館日：月曜、年末年始、開館（9:00 ～ 17:00）
TEL　095-820-5600 H：https://www.okakinen.jp

「南京大虐殺、慰安婦問題、強制連行、韓国併合、戦後保障」など加害の面から展示している平和資料館です。

岡正治（1994 年没）は韓国・朝鮮人被爆者の実態調査と救援に取り組んだ牧師です。「長崎駅」から徒歩 5 分という便利な「26 聖人殉教地」の近くです。

御 礼 と 感 謝

記念館はこの 13 年間、一切の公費補助を受けず、ご理解ご支援下さる皆様の「会費とカンパ」のみで支えられて来たことに、改めて御礼と感謝申し上げます。

昨年末のクリスマスの 12 月 25 日付で、過日来館下さった東京・小平市の女性からも「運動に感動しカンパです」と記載された大口のカンパが振込まれました。今は亡き知人から「有効に使って」と託された資金とのことで感謝申し上げます。

私たちボランティが幾ら頑張っても、資金や場所がなければこの様な運動はできず、皆様に感謝申し上げます。

その資金と中帰連の皆様がカンパを集め買って下さったこの記念館の狭い土地と、小さなボロの農機具倉庫が在ってこそ運動を続けることが出来ます。これからも私たちは「中帰連」の体験と平和への思いを後世に伝える努力を続けます。

蔵 書 案 内

『ある憲兵の記録』

山形県上山市出身の中帰連・土屋良雄さんは旧満州で憲兵でした。土屋さんは「スパイ」などの疑いで 1917 人の中国人を逮捕し、そのうち 328 人を直接、間接的に裁判も行わず「現地処分」の名において処刑しました。

土屋さんは戦後、中国へ行きその犠牲者の一ご遺族に会い謝罪しています。そして長い間、自身の加害・虐殺の体験を証言、認罪していました。

土屋さんの証言は山形放送のドキュメンタリー『ある戦犯の謝罪』でも放送され、記念館にもその映像を保存してあります。

ハルビンの 731 部隊で「マルタ」呼ばれた 3000 人余りの中国人の生体解剖・実験が行われたことは広く知られています。

『消せない記憶』

中帰連の湯浅謙さんは太原・潞安陸軍病院

の軍医でしたが、10 人余りの生体解剖に関与したことを証言し続けました。その映像も記念館にあります。湯浅さんは「生体解剖・実験」は 731 部隊だけでなく、各地の野戦病院でもやっていただろうと話していました。

事 務 室 か ら

横浜国立大学と早稲田大学の女子学生が「中帰連」を卒論にしたいと 10 月と 12 月に来館しました。過日、東洋大学の院生も卒論に「中帰連」を取り上げ、その卒論を記念館に寄贈戴いています、若い人たちが「中帰連」に関心を持って下さり、少しずつでも広まって行くことを嬉しく思います。

記念館では研究会や資料整理のボランティアなど、皆さんのご支援と善意で支えらており有り難う御座います。

師走のお忙しいなか 26 日に「大掃除をする」と、今年もボランティアの女性 5 人が県内や都内から自主的に駆けつけて下さり感謝と御礼申し上げます。

（「大掃除」に駆けつけて下さった皆さん）

「橋本勝さんの風刺マンガ」

『統計不正、アベノミクスにあらず、
景気を良くみせるアベノマジック！』

同封「振込用紙」について

「振込用紙」を皆様に毎号同封させて戴いておりますが、会費の請求ではなく年会費やカンパを振込む時にお使い下さい。「会費」の納入状況は会報送付封筒のお名前の下に記載してあります。尚、カンパは随時受け付けております。

また「会報」は会員以外のカンパを戴いた方や、来館された方などにも送らせて戴いており、ご了解戴ければ幸いです。

『NPO 中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）